Night & Day with BLOOD

10@8

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｎｉｇｈｔ　&ａｍｐ；　Ｄａｙ　ｗｉｔｈ　ＢＬＯＯＤ

【Ｎコード】
Ｎ５４３２Ｚ

【作者名】
１０@８

【あらすじ】
「一緒に神隠しにあわない？」
初対面の少女はそう問いた。

1ー1

夜咲咲夜(よるさきさくや)は普通とは違う学生であった。

パーマのかかった短い髪は彼女を見つけるのに最適な特徴だが彼女に来訪する人間はほとんど居ないに等しかった。たまにに居たとしてもそれは整った顔立ち故に興味を惹かれた異性が彼女と遊ぶ為に近づく人間だけであり、彼女はそんな異性達を突き刺すような冷ややかな眼差し、あるいは言葉少ない口調で突き放していた。それは例え純粋にお近づきになりたい同性であっても変わりはなかった。

彼女はほとんどの他人を拒否していた。それが理由で相手を泣かせようが言動によって恨みを買われようがそれで離れてくれるなら彼女にとってはむしろ都合がよかった。故に咲夜は学校では孤立していたしその事に対して気にするような素振りも改善する努力もしない為に学校で彼女に用事以外で話しかける生徒は減った。その行動の理由(わけ)を知る者は居なければ聞ける人間も学校には居なかった。

だがそんな彼女にも友人が居ないわけではない。何も余計な感情を抱かせないーー自分にとってただ有益、もしくはそうでありそうな人間にだけ彼女は口を開く。

丁度、向かい側にいる桐原譲夜(きりはらじょうや)のような人間に。

・

半分ほど沈んだ太陽のオレンジ色の光が図書室に入り込んで部屋を染めていた。普通なら本を借りに来る生徒の為に居るはずの職員や図書室を担当する生徒が居るはずだが彼らの姿はない。代わりに

制服姿の男女2人が長机に座っていた。他人を拒絶する少女、夜咲咲夜とその唯一の友人桐原譲夜だ。

譲夜の手元にはエースが2枚と2のカードが1枚に8のカードが1枚ある。対して向かい側にいる夜咲咲夜も手元にある4枚のカードを手の内がばれないように持っている。

「あんたの番よ？」

瞼を閉じて静かにそう告げた咲夜はトランプを伏せて読みかけの本の栞を外し、続きを読み始めた。絵になるような凛々しくもある光景だが譲夜はそんな彼女に目もくれずにいた。

「なあ、負けたらわかってるよな？」

「２０００円でしょ？早くしてよ」

一瞥するように譲夜を見ると咲夜はまた読書に戻った。

「はっ、財布用意しとくんだな」

互いの間にあったハートのクイーンが譲夜の所持していたダイヤの2に塗り替えられる。

「パス」

出されたカードを見もせずに咲夜は読書を続ける。

勝った、そう確信しながら出されていたカードを区切ると譲夜はエースを2枚机に出した。咲夜もカードが出された事を確認すると自分の手札を手元に寄せて見た。その様子を譲夜は不敵な笑みで見ている。

エース以上の強さは2あるいはジョーカーしかない。この終盤においてトドメ、あるいは保険としてその強さを持つカードがある可能性もある。終盤においてその2枚が揃っている可能性は極めて低い。故に譲夜は賭けた、とはいえ8割りは勝利を確信していた賭けだった。

「強気なのはいい事ね」

咲夜は静かにカードを引き抜くと不意に素早く、叩きつけるように2枚のエースの上にカードを重ねた。スペードの2と全てのカー

ドの代わりを担うジョーカーを。
「あ！？」
「何を驚いてるのよ？ん？」
「はっ！？え……？」
譲夜が驚愕を口にする前に咲夜はカードを切ると８を出した。
「８切り、そして３♪」
素早くカードを動かすと財布を取り出し、
「宣言通り用意したわよ？財布」
嘲り笑う咲夜は手招きをして譲夜に掛け金を要求する。何かを言いたげな彼の表情など見えないように。
最後の最後で有為転変となった勝負は２０００円の金額が咲夜の財布に収められた事により幕を閉じた。

・

「いつも言うけど、相手の手持ちくらい頭に入れといたら？」
上機嫌な勝利者のアドバイスは耳に痛い。結果が敗北（それと２０００円）なだけに尚更だった。
「うるせぇ、わかるかそんなん」
「ジョーカーと２が何枚出たか数えないあんたの自業自得ね」
暗い夜の街の空気を絡ませながら先程の勝負の会話を続ける譲夜と咲夜。互いにこうして放課後何かしらのゲームで勝負をしておりたまに先程のように掛け金がかかるが勝敗は五分五分である。
同じ歩幅で歩きながらも咲夜に対してそれ以上の会話はない。会話の材料がみつからないのもあるが無駄話を好まない咲夜の性格もあり、沈黙のまま家路を急ぐ。
とはいえ譲夜もこの沈黙に気まずさは感じない。既に彼女の性格を受け入れている故に気遣いは無用といつしか判断したのだ。

灯りの乏しい住宅街を抜けると広い国道に出た。
「……人、少ないわね」
咲夜が左右を見渡しながら呟くと譲夜も周りの様子を見渡す。平日で学生である2人が帰宅する時間にも関わらず国道の大通りには人影がほとんどいない。仕事帰りのサラリーマン達は明るい光で彼らを呼びかけている居酒屋などには目もくれずにどこか早足だった。
「ま、仕方ねえわな、今ーー」
「あ、待って」
「え？」
不意に咲夜に袖を強く引っ張られた。譲夜が何事かと問う前、凄まじく大きな音が起こった。圧倒的な音量が耳に響いたと同時に背中に当たった衝撃によって譲夜は咲夜に重なるように倒れこんだ。
「……くそ！？なんだよ……？」
背中に痛みを感じながら振り返ると車が巨大な火の玉となり燃えていた。丁度自分達から数メートル先のところで。その影響で後続車が次々と止まり始めた。
「嘘……だろ……？またか……」
そう呟くやいなや燃えている車の破片が周囲に降り注いだ。周りの人間は息を潜めて眺めたり、見慣れた異様自体に足早に家に帰ろうとしていた。
「コレで何十件目だよ。爆破テロ」
それもこんな目の前で。原型を留めておらず、運転手の生死は火を見るより明らかだった。
「見とれるのはいいけどいつになったら押し倒した私をいつ起こしてくれるの？」
「ん？あ、すまん」
咲夜の声にようやく身体を起こして立ち上がる。手を差し伸べようとしたがその手を無視し自分で立ち上がった。
「大丈夫か？怪我は？」
「はぁ、言うのが遅い……痛かった」

普段は見せない凄まじい形相で譲夜を睨みつける。温厚な彼女から感情を感じ取ったのは久々だった。
「にしてもお前よくわかったな」
「何が？」
「いや、さっき俺を引き止めたろ」
「あ、あれ？ちょっと用件があっただけよ」
「用件？」
「明日はＵＮＯで勝負ね。それだけ」
あっそ、と言うとそれ以上は特に何も聞かなかった。
「しかし、こんなに間近で見るとはな」
「行くわよ」
呆気にとられてる譲夜をよそに咲夜は間髪を入れずに歩き出した。
少しだけ眺めておこうか。などと無神経な考えが頭を巡ったがやめておいて歩き出した。
爆破テロの他にこの街で起きてるもう一つの事件に巻き込まれたくなかったから。

・

遠くでサイレンの音が聞こえたまま。会話は特になく歩いて行く。さっきの爆破の現場の話もないまま、足取りも変わらずに。
「それじゃ」
別れのいつもの十字路に差し掛かった時、咲夜は軽く手を振ってサヨナラを告げた。
「おう、じゃあな。気を付けろよ」
「そっちも爆死したり神隠しにあわないようにね」
憂慮にも警告にも聞こえる言葉を残し踵を返した咲夜の後ろ姿が曲がり角に消えるまで譲夜はしばらく見つめていた。

「さて、と」
譲夜は携帯を取り出して登録されている番号を押す。
液晶画面に紅音野空羅（あかねやそらら）と表示されると耳元に携帯を当て電柱に寄りかかる。発信音ばかりしか聞こえない少し長すぎる時間。
ここ1週間近く同じ事を毎日試してはいるが持ち主は出てはこない。やがて発信音から変化が起こるがそれはテンプレート化された機械の音声のみだった。
『おかけになった番号は電波の届かない場所にあるかーー』
「クソ」
前回と同じ期待と外れた答えに譲夜は短く息を吐いて歩き出した。

1週間程前からこの街はおかしくなっていた。
最初の事件がいつ起きたのかはわからない。1～2人程度の行方不明者ならば、それがどれほど人々の認識にあろうが皮肉にもただの些細な事として扱われる。
そんな物扱いに警鐘、あるいは祟りの部類なのかはわからない、が1週間という短い時間の異変はこの街で67人という異様な数の行方不明者を生んだ。
犯人も目撃されておらず行方不明者の人間性もバラバラで何よりも日常の一貫であるかのように前振りもなく突然消えてしまう。誰が言ったかわからないが神様に消されると噂されいつしか神隠しと呼ばれるようになった。
同時期に起こりだした連続無差別爆破テロの影響で街には警邏中のパトカーが溢れて厳戒態勢が敷かれていた。犯人側からの犯行声明は今もない。
恐らくこの街は今世界から見てもかなり危険な街であるのは確かだった。
爆破テロという無差別さと神隠しという説明出来ない事柄。2つ

の異様事態に街の住人は恐怖を抱き夜間の外出は控えていた。
神隠しにあった紅音野空羅もその事を守っていたはずだ。

3回目の呼び出しに出ないなら諦めるつもりだった。
そもそもここまで電話に出ないなら一生出ない可能性だってある。だが行方不明という形は人に余計な期待感を抱かせ、結果がわからない以上藁にもすがる思いで消えそうな希望に過剰な期待をしてしまうのだ。譲夜自身も最悪の可能性を考慮しつつも心はそれを認めようとはしなかった。
「……出ろよ」
立ち止まり、苛立ち混じりに哀願するが変わらない答えに諦めて再び歩き出した。

「ん？」
携帯の電源を切り角を曲がって家路まであと少しのところで珍しい光景を見た。白人の銀髪の女の子がいる。ただそれだけなのだがその女の子は人の目など構う事なく平然と自身の身長よりも高い家屋の塀で座っていた。
（……どこ座ってんだこの子）
外灯の灯りが舞台のスポットライトのように丁度彼女に照らされており容姿は確認できた。腰まである銀髪に丁寧に紐を結んだウエスタンブーツ。赤と黒のチェックのアウターとセクシーなホットパンツ。インナーにはイギリスの国旗が大きくプリントされたシャツ。場所と時間を考えても観光客とも思えそうにない。
（……まあ、可愛いからってなにやっても許されるとか思ってんのかねえ）
ふと、彼女の格好を眺めていると目が合った。少し気恥ずかしくなり目を逸らすが綺麗な顔をした彼女は譲夜が目を逸らしてもジッと見てくる。

（なんだよ……）
銀髪の少女にまるで新しい生き物を見たかのように爪の先から頭のてっぺんまで全身をくまなく眺められる。
時に考えるような仕草を見せてくる彼女の観察されるような視線が少しだけ痛い。遠回りして帰ろうかと思ったがここから迂回すると時間がかかる。仕方なく譲夜は彼女の目の前を通り過ぎることにした。自分を追うような瞳にむず痒さを感じながらも。
「……んー、ねえ」
彼女の目の前を通って数歩進んだところで呼びかけられた。声をかけられたことに多少とまどいつつ譲夜は振り返る、同時に彼女は塀から降りてきて見据えてきた。
「君さ、今暇？」
銀髪の少女は日本人である譲夜も驚くくらい流暢で違和感のない日本語を口にした。ここまで達者な日本語を話す外国人もなかなかいないだろうと思いながら。
「なんですか？」
「暇だよね？学生？ちょっと頼みたい事があるんだけどさ、お姉さんに少し付き合ってくれないかな？危ないけど」
普段なら逆ナンのような展開に多少なり心踊りそうになるかもしれないが最近の街の状況と先程の爆破テロの現場を目撃した譲夜にとっては警戒を促す言葉となった。
それでいてあまりにも怪しく隠す必要すらないくらい清々しい発言が飛び出してきたので思わず後ずさる。
「……」
平静を装うが内心の冷や汗は隠せそうにない。己の意思とは関係なしに鼓動が早くなった。
「まあ、強制はしないよ。コッチも妥協しないけど……死んだらゴメンね」
曇りない笑顔で矛盾した発言をして彼女は少しだけ近づいてくる。ゆっくりとしたその動作が余計につかみどころのない彼女の不気味

さを強調するように演出していた。
「ちょっ、ちょっと待て」
譲夜は全身の毛が逆立つのを感じながらも彼女と一定の距離をとった。だが1歩下がる度に向こうは少しずつこちらに踏み込んでくる。
「大丈夫、すぐに終わるから、さ？」
直後彼女の顔は譲夜の息のかかる距離にあった。いつの間にというわけでも肉眼で捉えられないくらい瞬間的に移動したわけでもない。彼女は数メートルはあった距離を僅か1歩で縮めてきたのだ。
「え…？」
「ふふっ……」
何が起きたかわかる故の恐怖もある。直感で身の危険を感じた譲夜は全速力で逃げ出した。恐らく、捕まったらなにをされるかわからない。なにより異国のあの少女の言葉は命の危険を孕む発言だった。
「な、なんだよあの女……！？」
「へえ、結構足は速いんだね？」
死に物狂いで走る譲夜は少なくとも追いつかれる様な脚力ではないはずだった。だが隣にいる少女は息も切らさず余裕の表情で自分の横を走っているではないか。
「な！？」
驚愕を口にする間もなく銀髪の少女はより一層速く動き譲夜の行き先を塞いだ。ぶつかりそうになり足を止めようとすると同時に絶妙のタイミングで腕を掴み上げられる。
「くっ！？お前……！」
「ほら、逃げない。最後まで話を聞くの」
「なんだよいきなり！放せ！」
嫌悪と恐怖混じりに彼女を振りほどこうとするが譲夜の腕は彼女の華奢な体格とは似つかない力で強引に掴まれている。何度も振りほどこうと試みるが厳然と表された力の差により譲夜は赤子同然と

なっていた。
「って、待ちなさい。暴れるな！」
「っざけんなコラ！放せ！放しやがれ！」
譲夜は力任せに腕を振る。とあっさりと放された手によってバランスを失い勢い余ってその場に倒れこんだ。
「うわっ！？あー、だ、大丈夫？ほら立って……てか放せって言われたから放したんけど」
アスファルトに身体を打った痛みと呆気ない事態の変貌に思わず苛立った。
「お前、なんなんだよ！」
差し伸べられた手を払いのけ自力で立つ。
「うーん、これが日本のアニメとかゲームで噂の最悪の出会いってやつね」
「黙れ」
譲夜は相手の突然の変化が気に入らなかった。冷厳な態度から呑気そうな口調に早変わりしたこの素性の知れない銀髪の少女にペースを持ってかれている気がしたのだ。
「あ、私リオっていうんだけどさ、なんかゴメンね。怖がらせたみたいで」
改まり自己紹介をし始めたリオと名のる少女。得体の知れない恐怖感や警戒心は苛立ちに変わっており気楽にこちらも名乗りをあげる気分ではなかった。
「そうかよ。今、暇じゃないんで」
自身に害がなさそうと判断した譲夜は家まであと１０メートルもないので早足で歩き出す。すると慌てながらこの女も付いてきたではないか。
「なんだよ？」
「えっと、話だけでも聞いてくれない？……くれないよ……ね……はぁ、どうしよ……」
追ってきたかと思ったら今度はしゅんとしながら勝手に立ち止ま

った。少しだけ気にかけて振り向くとなにやら俯きながらソワソワとしている。
「……だからなんだよ？」
話を一方的に聞かなかった事にバツが悪くなったのか罪悪感を感じてしまう。
「え？」
「単刀直入に話せ」
「えっと、い、いいの？」
「聞くだけだよ、なに？」
そう言うとリオと名乗った少女は安堵して少しだけ笑う。冷たい夜風が通り過ぎて彼女の腰まである銀髪をなびかせていった。
「えっと、ね。んーと、」
躊躇うように口からなかなか言葉は出ない。だが待たせている相手に時間をかけるわけにもいかないと判断したのか。やがて意を決して彼女はーー
「私と一緒に神隠しにあわない？」
「……あ？」
その言葉に困惑した譲夜を余所にリオは可憐な笑顔を振舞った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5432z/

Night & Day with BLOOD

2011年12月18日10時50分発行